

意見書

東京大学総長選考会議
議長 小宮山 宏 殿
委員 各位

今回の総長選考過程に多くの疑義が残っている状況に鑑み、2020年9月28日付の緊急アピールにおいて、われわれ教員有志が意向投票の即時延期を求めたにもかかわらず、貴職は意向投票を強行なさいました。その結果として、第1回投票で過半数を制した候補が次期総長予定者と決定しました。

しかしながら、われわれの質問状（2020年9月16日付）および公開質問状（2020年9月23日付）に対する貴職の回答は、総長選考の「透明性と公平性」を確保するうえで、はなはだ不十分なものであったと考えます（詳細はわれわれのWebサイト〔下記〕における「公開質問状に対する「回答」への応答」をお読みください）。また、15部局長から貴職宛てに出されたという要望書（2020年9月24日付）、および、同じく貴職に宛てられた元理事有志からの要望書（2020年9月25日付）に対する貴職からの回答は、われわれのような一般教職員に対しては直接開示されておらず、そこで説明を求められていた疑惑はまったく晴れておりません。とくに、15部局長からの要望書で指摘されていると報道のあった、本年9月7日の総長選考会議における選考方法の妥当性ならびに匿名文書の取り扱いなどをめぐる疑義については、曖昧模糊とした情報が拡散されるばかりで、明確な説明がなされたとは言い難い状態です。

このような状況を背景として、われわれ教員有志による緊急アピールに対しては、9月28日正午から10月1日20時までのわずか3日半あまりの短期間に、本学構成員のうちから400名を超える賛同者が集まりました。ここには教職員のみならず、多くの学生も含まれております。本意見書にはそうした賛同者の声を一部抜粋して添付しました。これらの声が示すように、今回の総長選考過程に対する疑念は根深く、全構成員にまで届く明確な説明が必要とされていることは間違いありません。

については、今般の総長選考のプロセスに関して、貴職に適切な説明責任を果たされることを求め、なおかつ、今後の総長選考をより透明にして公正なものとするべく、ここに以下の取り組みを、貴職ならびに総長選考会議委員各位、および、東京大学総長、次期総長予定者に要求いたします。総長宛および次期総長予定者宛の意見書については、本意見書にその写しを添付いたします。

要求項目

1. 今回の総長選考の一連の過程、とくに2020年9月7日の総長選考会議の議事進行について客観的な調査・検証を行なうため、東京大学総長直下に調査委員会を設け、速やかに疑惑解明にあたること。同調査委員会は、総長選考会議の現委員以外のメンバーからなるものとする。総長選考会議は、調査にあたって必要とされる当日の会議を録音した音源や詳細な議事録を調査委員会に提出し、調査に全面的に協力すること。また、調査委員会はその調査・検証のプロセスおよび結果を学内外に公開すること。調査委員会における総長選考過程の検証にあたっては、われわれの緊急アピールのうち、アピール3で指摘した、本年4月に行なわれた総長選考会議内規の改正をめぐり問題点ほか、不透明な選考を許すことになった制度的瑕疵についても十分に吟味すること。

2. 1の調査・検証結果を踏まえ、総長選考会議は、今回の総長選考の過程を真摯にみずから検証し、その検証結果とともに、総長選考の真の意味での「透明性・公平性」を高めるための方策をすみやかに本学全構成員に対して提示すること。その際、われわれの緊急アピールに寄せられた本学構成員の率直な意見（添付資料「緊急アピールに対する賛同者の声」）に耳を傾け、総長選考会議が考える「主体的」な総長選考と一般構成員の考える選考の「透明性・公平性」とがいかに乖離しているかを十分に認識すべきこと。

3. われわれは、今回の総長選考において総長選考会議への不信感をもたらしたものが、「総長選考会議が主体となって進める選考」（本年4月28日付、総長選考会議議長名による通知より）と称されるところの、総長選考会議の「主体性」に関する了解の齟齬にあったと考える。この齟齬を解消するためには、総長選考をめぐる検討や議論を総長選考会議内のみとどめるべきではない。については、2の総長選考会議の自主的改善策とは別に、東京大学総長直下（ないし、次期総長直下）に「総長選考に関する懇談会」を設け、国立大学法人化以降の総長選考のあり方を総合的に検証し、学内外の正確な状況認識にもとづく、将来的な総長選考の大局的な方針を検討することによって、総長選考のあり方に関する全学的な合意の再形成を図る。同懇談会には、教員代表、職員代表のほか、過半数代表者、学生自治会などの代表、東京大学新聞をはじめとする学内メディアの代表も加わることが望ましい。

以上は、今後の総長選考をより一層透明性・公平性のある選考とするための提言であり、4月28日の文書で貴職が述べているように、「社会からの期待に応えられるよう、東京大学の良識や伝統に則して、各構成員の真摯な行動により、総長選考が適正に実施されなければならない」がゆえの要求です。貴職および総長選考会議におかれては、上記1の調査・検証への全面的な協力と2に記された自主的な改善策の提示をとくに強くお願いします。

本意見書に対する貴職および総長選考会議の誠実なご対応を切に希望しております。

2020年10月5日

東京大学教員有志

代表 田中 純（総合文化研究科）
阿部公彦（人文社会系研究科）
佐倉 統（情報学環）
清水晶子（総合文化研究科）
水越 伸（情報学環）
山田広昭（総合文化研究科）

連絡先：田中 純

2020sochosenko.frage@gmail.com

Web サイト：<http://2020sochosenkofrage.mystrikingly.com/>

添付資料：

1. 緊急アピール（2020年9月28日付）
2. 緊急アピールに対する賛同者の声（「9.28.緊急アピール賛同者のお名前、人数、コメント」より）

東京大学総長選考、教員有志の緊急アピール

—— 意向投票の即時延期要請、候補者情報開示、および、現状の問題点と望ましい総長選考のあり方について ——

【ポイント】

アピール1. 東京大学総長選考会議および東京大学総長は、9月30日の意向投票を即時延期し、適正な総長選考体制を改めて築くべきである。

アピール2. 健全な意向投票の前提となる情報として、第1次総長候補者および第2次総長候補者の氏名・職名をここに開示する。

アピール3. 今回の総長選考過程に混乱をもたらした遠因は、本年4月に行なわれた総長選考会議内規の改正にある。総長選考会議の権限を恣意的に拡大するこの内規改正の問題点を指摘し、望ましい総長選考のあり方の全学的な検討を呼びかける。

【前書き】

われわれ教員有志は、東京大学総長選考会議議長に宛てた2020年9月16日付の質問状、および、それに対する回答を不満として出された2020年9月23日付の公開質問状において、東京大学総長選考の現在にいたるまでのプロセスに関し、透明性と公平性の回復を求めました。しかしながら、同会議議長からは一連の事態について満足のゆく回答は得られませんでした。公開質問状に対しては、期限までの回答すらありませんでした。

この間に、東京大学の4学部長および研究所長15名連署による、総長選考会議の審議過程に関する説明を求める要望書のほか、東京大学の元理事10名連署による、選考プロセスの一時停止と十分な調査検証を行なったうえでの再開を提案する要望書が、総長選考会議議長と委員宛に届けられています。これら一連の経緯は複数のメディアによって報道され、社会的な関心もきわめて高くなっています。

総長選考会議はこれら複数の要望書や質問状に対して、いまだ納得できる回答を示すことができていません。総長選考過程に多くの疑義が残っている現状で、強引に意向投票に進み、総長予定者の選考にいたることは、東京大学の歴史に必ずや大きな禍根を残すことでしょう。

よって、切迫した事態に鑑み、われわれ教員有志と賛同者はここに、次の3点を緊急アピールとして公表いたします。

【アピール1——意向投票の即時延期と総長選考過程の調査・検証、適正な体制による選考】

このような状況下で9月30日の意向投票実施は不可能です。われわれ教員有志とその賛同者は意向投票をただちに延期することを総長選考会議および東京大学総長に強く要請します。総長選考をそのようにいったん停止したうえで、ここにいたるまでの総長選考のプロセスを、総長選考会議ではない組織によって客観的に調査・検証し、その結果を学内外に公開することを求めます。そして、その調査・検証結果を踏まえ、適正な総長選考が行ないうる体制で、誰もが納得のゆく総長選考を再開することを望みます。

【アピール2——総長候補者情報の開示】

総長選考のプロセスの透明性と公平性を少しでも回復するために、われわれ教員有志によって行なうことが可能な措置として、次の情報をここに公開いたします。

→意向投票が行なわれ、第1回投票で過半数の票を得た藤井輝夫氏が次期総長予定者となったことにより、第1次総長候補者および第2次総長候補者の氏名・職名の情報はその役目を終えたと考え、緊急アピールには添付いたしません。いずれの情報もいくつかのメディアですでに報道されております。【2020年10月2日18時35分記】

1. 7月7日の代議員会における投票によって選出された第1次総長候補者11名の氏名・職名(50音順、2以下も同様)
2. 7月22日までに経営協議会から推薦のあった第1次総長候補者1名の氏名・職名
3. 辞退者を除き、上記1および2によって確定した第1次総長候補者10名の氏名・職名
4. 9月7日の総長選考会議にて選定された第2次総長候補者3名の氏名・職名

これらのいずれについても、総長選考会議は公開範囲を代議員のみ、あるいは、学内教職員のみ限定していますが、総長選考会議規則およびその内規に、学内外への公開を禁止する規定はありません。また、公開を行わない理由について照会した、われわれの質問状および公開質問状に対し、総長選考会議議長は合理的な理由を回答していません。

【アピール3——現状の問題点と望ましい総長選考のあり方】

われわれ教員有志は、質問状および公開質問状において、第2次総長候補者が前回総長選考の5名から3名に削減され、多様性が失われた理由を総長選考会議議長に問いましたが、その点についての明確な回答は得られませんでした。この削減の根拠となる総長選考会議内規の改正は、本年4月28日付でなされています。この内規改正においては、次のような重要な変更が2つの条項について行なわれました。

A. 図1が示すように、第2次総長候補者の選定をめぐる改正前の第11条(図1左)が、現行の第8条(図1右)のように修正され、「その人格、学識、及び本学の教育研究を適切かつ効果的に運営する能力について」という条件が削られるとともに、「5名程度」という規定が「3人以上5人以内」と変えられている。

図1

(候補者の選定)	(候補者の選定)
第11条 選考会議は、第1次候補者の各々に対し、第4条の規定により提示した求められる総長像に照らし、 <u>その人格、学識、及び本学の教育研究を適切かつ効果的に運営する能力について面接を含めた調査を行い、その結果に基づいて、5名程度の第2次総長候補者(以下「第2次候補者」という。)を定めるものとする。</u>	第8条 選考会議は、第1次候補者の各々に対し、第4条の規定により提示した求められる総長像に照らし、面接を含めた調査を行い、その結果に基づいて、 <u>3人以上5人以内の第2次総長候補者(以下「第2次候補者」という。)を定めるものとする。</u>

B. 図2が示すように、総長予定者の決定をめぐる改正前の第14条(図2左)が、現行の第11条(図2右)のように修正され、「第8条の調査」が条件として追加されている。

図2

(総長予定者の決定) 第14条 選考会議は、前条の投票の結果を考慮して総長予定者を決定する。	(総長予定者の決定) 第11条 選考会議は、 <u>第8条の調査及び前条の意向投票の結果を考慮して</u> 総長予定者を決定する。
---	--

まず、Aの人数規定について指摘すれば、意向投票とは本学全教員の意思を問うべき場であり、総合大学としてその意思決定のための選択肢はより多く示されるべきところ、それを「3人」にすることは、有権者の選択の幅をあらかじめ総長選考会議のみの判断で狭めてしまうものです。この人数規定は、国立大学法人化直後には「3人以上5人以内」の規定であったところ、内規改正によって「5名程度」とされたものであり、今回の再改正は多様性を重視する本学の理念に背反する、大きな後退と言わざるをえません。

さらに、Aの「その人格、学識、及び本学の教育研究を適切かつ効果的に運営する能力について」という条件削除について言えば、総長が備えるべき人格・学識・教育研究の運営能力を不問とし、「面接を含めた調査」を恣意的に一面的なものとしてしまう可能性を孕んだ、きわめて由々しき改悪にほかならないと考えます。

Bにおいて付け加えられた「第8条の調査」とは、ただいま指摘した「面接を含めた調査」であり、その調査の内容が総長選考会議の恣意に委ねられた一面的なものとなり、総長が備えるべき人格・学識・教育研究の運営能力を不問にしたうえで、その一面的な調査結果を意向投票の結果と同等に扱って総長予定者を決定することを可能にしてしまっています。旧内規の第11条が定める「面接を含めた調査」はあくまでも第2次総長候補者を絞り込むためのものであり、行なわれた調査の効力はそこで停止するのに対し、現行の第11条ではこの調査が意向投票後の総長予定者の決定までも強く拘束するものになっているのです。

以上のように、AおよびBの総長選考会議内規の改正は、全教員による意向投票の選択肢を総長選考会議の独断で狭めることを可能にしたばかりではなく、総長選考会議が行なう「面接を含めた調査」を恣意的・一面的なものにしてしまう道を開き、かつ、その調査を意向投票と同等に扱うことにより、総長選考会議の権限を極端に拡張するものであったことが明らかになります。その結果が今回の総長選考における第2次総長候補者の選定でありました。

本年4月に行なわれた総長選考会議内規のこうした改正は、総長選考に「透明性と公平性」をもたらすものであるどころか、総長選考会議の権限を代議員投票や意向投票に代表される学内民主主義よりも上位に位置づけ、総長選考のプロセスにおける学内民主主義を骨抜きにして、真の意味での「透明性と公平性」をはなはだしく毀損してしまうものです。われわれ教員有志および賛同者は、このような内規にもとづく今回の総長選考過程が、上に記した危惧をまさに具現化し、総長選考会議の極度のブラックボックス化と本学構成員の多くの意向とは背反した結果を招いてしまってい

ると考えます。

【まとめ】

それゆえにわれわれ教員有志および賛同者は、何よりもまず、目下迫りつつある9月30日の意向投票の即時延期を、総長選考会議および東京大学総長に対し緊急に要請します。そのうえで、現状にいたるまでの経緯の客観的調査・検証を通じ、適正な選考が遂行できる体制を築いたうえで、はじめ、総長選考は再開可能になると信じます。われわれ教員有志はそれに先立ち、第1次総長候補者と第2次総長候補者の氏名・職名の公開によって、総長選考の透明性と公平性を少しでも回復したいと考えました。われわれ教員有志と賛同者はさらに、今回の総長選考にいまだかつてない混乱をもたらした要因は、上述した内規改正をはじめとする、総長選考会議の独断的な権限強化にあると見定め、今回の総長選考のプロセス全体、とくに総長選考会議の議事運営に対する徹底した調査・検証のうえで、将来的には、総長選考のあり方に関する全学的な合意の再形成、そして、正しい意味における「透明性と公平性」を確実に保証する総長選考会議規則および同内規の改正をここに強く要求します。

2020年9月28日

東京大学教員有志

代表 田中 純 (総合文化研究科)
阿部公彦 (人文社会系研究科)
佐倉 統 (情報学環)
清水晶子 (総合文化研究科)
水越 伸 (情報学環)
山田広昭 (総合文化研究科)

賛同者リストは次のサイトに掲載予定。
2020sochosenkofrage.mystrikingly.com

連絡先：田中 純
2020sochosenko.frage@gmail.com

9.28.緊急アピール賛同者のお名前、人数、コメント

2020年9月28日（月）正午に公開した緊急アピールに対して数多くの賛同の声をいただきました。まことにありがとうございました。

80時間後の10月1日（木）20時点で締め切り、最終的に賛同いただいた方のお名前や人数、そして寄せられたご意見の一部を公表いたします。

408名の教職員、学生のみなさまのお名前や声はバラバラではありません。たがいに結びついてウェブとなり、キャンパスの文化的土壌を汚染から救う菌糸の役割を果たすことでしょう。

2020年10月1日

東京大学教員有志

代表 田中 純（総合文化研究科）

阿部公彦（人文社会系研究科）

佐倉 統（情報学環）

清水晶子（総合文化研究科）

水越 伸（情報学環）

山田広昭（総合文化研究科）

賛同者数（緊急アピール発出後、80時間で集まった数）

教員 195名（特任、非常勤、名誉教授等の方を含む）

職員 28名（特任、非常勤の方等を含む）

学生 185名（大学院生、研究生等を含む）

合計 408名

東大総長選挙2020について一言

選考委員会においてきわめて不自然な決定がなされており、このまま進むと大きな禍根を残すことになります。いったんリセットして、日本を代表する大学にふさわしい公平な手順で総長選をやりなおすべきです。

世界に恥じない東大総長選考を！

やはり、本当に不透明なプロセスの中で行われているので、透明性を確保したうえで、やり直していただきたいと思います。

今回の選考の問題について第三者委員会により検討した上で、プロセスの手続き的正当性や可能な限り透明な公開性を確保して選考をやり直すべきである。

総長選考会議は何をしているのでしょうか？

今回の選考に関してはリセットすべきと思う。

将来的には国立大学法人法の改正が必要であるが、まずは東大から総長選考の適切なあり方を発信すべきである。

公明正大な選考を望みます

透明性の確保とフェアであるという基本を守ってほしい。

疑念がこれほど広がっている以上、強引に押し切っても禍根を残すだけです。

緊急アピールに同意します。

恥ずかしながら、今まで総長選考会議の役割と権限を正確に理解していなかったのですが、今回の選考過程で浮上した選考体制のゆがみ、瑕疵などを見て、抜本的な体制の改革が必要になると思います。今回はF氏に投票することでは、何も変わりませんし、6年後にもっとひどくなる可能性が高いでしょう。取りあえず即時延期しかありません。署名活動でそれが可能になるのでしょうか。

全学構成員の意向を尊重する姿勢で臨まないと東大の学問が痩せ細ってしまいます。

なぜこのように質問状や要望書が出される事態になったのか、本学は、冷静に検証し、社会に向けて説明する必要があると思います。

第二次候補者氏名・経歴等を学外に公表しないのは、選考の透明性の観点から大きな問題があると思います。加えて、選考の過程を社会に明示することは、大学運営に対する社会の関心を喚起し、ときには批判的な目を向けられながらも真に”よきサポーター”を獲得してゆく上で、大きな効果があると思います。

大学の自治を守るためにも、選考過程を一からやり直した上、二度とこのようなことが起きぬよう、選考会議議長には相応の責任を取っていただくのが妥当と考えます。

今回は文科系総長だと思っていたので、不透明な選考プロセスに抗議します。大学自治が失われていくことに危機を感じます。

今回起こっているのは東大の歴史のなかでも大きな危機となる可能性があるので大変憂慮している。小宮山さんはもう一度考え直した方がよい。

公正に選考が進められていることを信じたいですが、疑義を呈するご意見が多数出されています。一旦プロセスを止め、大多数の方が納得のいく選考にして欲しいです。

選考会議の選考過程は、総長選考のプロセスとして大きな瑕疵があると考えている。選考会議のメンバー、とりわけ一連の問題と選考を統括した議長の責任は重いと判断します。

東大は総合大学であるにもかかわらず、今回の候補者が医学部名誉教授の他、2名がいずれも工学系と著しく多様に乏しいのを憂慮しています。

大変かもしれませんが、一旦、延期していただき、説明及び議論を尽くしてたいと思います。

丁寧に説明を尽くし、公明正大な方法で選考すべきだと思います。

今回の総長選で、東大も権力をめぐるマニピュレーションが横行する三流大学に成り下がったかがっかりしました。誇りを持てる大学を取り戻したい。

アピールの内容すべてに完全に賛同するものではないが、9/7選考会議における選考の妥当性に疑問点が指摘されている以上、意向投票は延期すべきと判断する。

疑義アリと声を上げる有志の皆さまがいなければ、知らずに過ぎてしまったと思います。開かれた総長選と開かれた大学を望みます。

今回の総長選考過程の不透明性、閉鎖性については強い不信感を覚えます。議長からの回答文を読んでもモヤモヤが増すばかりです。誰もが納得する公正な手続きを経ないまま投票を執行することは民主主義への冒涇だと思います。

下手な大学ドラマではあるまいし、選考過程に禍根を残すようなことは避けるべきですね。

恥ずかしながら、今まで総長選考会議の役割と権限を正確に理解していなかったのですが、今回の選考過程で浮上した選考体制のゆがみ、瑕疵などを見て、抜本的な体制の改革が必要になると思います。今回はF氏に投票することでは、何も変わりませんし、6年後にもっとひどくなる可能性が高いでしょう。取りあえず即時延期しかありません。署名活動でそれが可能になるでしょうか。

これだけ問題視されているのに、まさか予定通りの投票を強行して来るとは思いませんでした。

東京大学総長選考のプロセスに関し、透明性と公平性を求めます。

総長選考会議のあり方に強い疑念を抱いております。選考過程の公平性と透明性の確保を第一に、然るべき改革を望みます。大学の自治が、特定少数の権力者、また政財界の論理に左右されるようなことがあってはなりません。

意向投票の結果が尊重されることはもちろん、結果がどうであろうと選考過程の公開と、不備があればやり直しも含む適切な対応を望みます。

風通しの良い学内行政を祈っております。

あとは良識を信じます。

透明性があって公平な選挙を求めます。

研究・教育の場は、市場化の試験場ではありません

やはり透明性が確保されない選挙はいやです

意向投票とかのためにA1タームの授業日を3週間前にいきなり代替日なしに全学一斉休講を強いるような横暴はあり得ません。

陰謀論に陥らないよう状況を注視しておりましたが、それでもなお現行の選考の進み方を見ると結論ありきの出来レースなのではないかという疑念が拭い切れません。社会の付託を受けて学術研究と教育を行う場として、大学にとって社会との連携が非常に重要であるということには些かも異議はありませんが、産業・経済・政治等の各界からの過度の介入は何としても避けるべきであると考えます。今回の総長選考は、そのプロセスが透明性を欠き十分な説明を果たしていないことをはじめとしてこのような介入の意図が見え隠れしているように思います。本学の職員として、また一卒業生として、今後の本学のあり方を、悪い方に、不可逆に傾けうる現行の総長選考の手法には、危機感を覚えざるを得ません。

学生としてもこのような十分に民主的とはいえない環境の下で学んでゆくことに不安があります。

不透明な東大総長選の独断的な実施に反対します。

総長選考に学内だけでなく学外からの多様な意見を取り入れることは、とても良いことだと思います。ただ、その学内外の多様な人たちがより納得するようなプロセスを経ないと、多様な意見を取り入れる意味は薄く、今回のような対立を生むことになってしまうと思います。総長選考にかかわる人たちは全員この東京大学をより良くしたいと思っている点では同じだと信じているので、より多くの人々が納得できるように努めてほしいです。

総長選考会議の権限強化とブラックボックス化は、今回の選考のみならず将来にわたって恣意性が入り込む余地が大きく、容認すべきではないと考える

誰もが納得できる透明なプロセスのもとで総長選考を行ってほしい。現状はどう考えてもおかしい！

今回の件は、総長選考会議が暴走しているのではなく、「本来与えられた役割」を果たしているにすぎないと思います。ならば総長選考会議は廃止するしかありません。

今回の総長選考がどのような過程を経ているのかが全く不透明であり、かつ総長選考の基準が民主性と多様性を確保しているとは言えないものに変えられていることに、東京大学の学生として強い不安と疑問を感じております。学内政治は学生の研究環境はもちろんのこと、生活基盤をも左右する力を持っています。その上で、総長選考が民主的に、透明に、そしてインクルーシブに行われることは、すべての教職員と学生の権利が守られるための最低限の必須条件ではないでしょうか。今後も学生が東京大学で研究に専心することができるように、意向投票の即時延期と、選考過程の公開と候補者の多様性の確保、そして総長選考基準を以前のものに戻すことを、強く求めます。東京大学当局が良識ある大学運営を行うであろうことを、私は現時点ではまだ信じております。どうか良心にしたがって、今回の総長選考の見直しをご決断ください。

公平な選挙が行われることを望みます。大勢が納得できないまま次期総長が選出されることは避けなければいけないと思います。

声をあげられた方々一人一人に敬意を示します。総長の選考によって、学生である私達が東京大学で過ごす時間の持つ意味が大きく変わりうると考えています。だからこそ、公正な形で総長が選考されることを望みます。

様々な立場の方々から疑義があがるなか、東京大学総長選考会議および東京大学総長は、個々の疑義に誠実に回答するべきだと考えます。これまでも公開質問状に対する回答が行われてきましたが、これらは誠実なものではなかったと考えます。誠実な回答を行い、その回答に依って改めて議論を行うためには、9月30日の午後までという時間は、あまりに限られていると考えます。意向投票の延期など、即時かつ具体的な措置が必要だと考えます。

適正なプロセスでは実現できない改革は、不正な改革です。

透明性の確保、ならびに自然科学分野と人文学・社会科学分野のバランスの確保、そして女性（ないし非男性）の教職員も候補に名を連ねられるような学長選考過程を確保してほしい。

総長選考会議というブラックボックスを放置することは、学問と自由を追究する大学の存在意義さえも揺るがす事態だと考えます。

選考プロセスの透明性確保を求めます。考えたくはありませんが、総長選考自体がslippery slopeを滑り落ちようとしているように思えてなりません。ブラックボックスの中で行われた「討議」により選出された総長が東京大学を代表する人物となることに危機感を覚えます。私どもは、そもそも総長選考会議にて討議が行われているかどうかすら確証を持ち得ていないのです。総長選考会議を信頼せよと仰るのならば、再三言われているように情報開示と第三者による公平性の確認をするべきではないでしょうか。

恣意的な判断が許される不透明な選考は民主主義における主体性のあるべき姿ではないと考えます。開かれた公正な選考が行われることを一学生として切に願っています。

透明性のある運営を求めます。

透明性の高い、公平、公正な選考をしていただきたいです。

疑問の声が上がっているなかで投票を強行することに反対し、透明性と公平性の確保を求めます。

仄聞したところ、今回の総長選は今後の大学のあり方にも大きく影響するように思われます。改革を行うのであれば、いや改革を行うからこそ開かれた場における徹底的な議論が必要なはずで、今後の東京大学、ひいては日本の大学のあり方を考えるにあたり重要な役割を担う東京大学総長の選挙が、公明正大に行われることを切に願っております。

今回、学内に留まらず全国メディア含め総長選考が問題となりました。私が思うのは、この問題は決して今回の総長選考だけがこんにち問題になったのではなく、国立大学法人化に伴う教授会自治破壊・経営協議会独裁体制という日本の文教政策あってのことで、改めて04年以来の法人化体制、そして現在の『国立大学法人の戦略的経営実現のための検討会議』に象徴される大学改革路線の犯罪性が明らかになり、全社会的に暴露されるに至ったということです。地方大学などでは既に意向投票ガン無視だったり、あるいはそもそも意向投票をやらなかったりというレベルにまでなったこの政策、推進してきた政府・財界はさも社会に開かれた総長選考にするかの如き口ぶりでしたが蓋を開けてみればこのザマです。"会社"（経営者）には開かれたのかもしれませんが、結局は力の強いところが推す人が通ります。金のない文系学部出身者、女性など社会的差別を受けている人には開かれていない、ブラックボックスに他なりません。総長選考以外の大学運営全体も同様です。法人化以降ガバナンス強化が叫ばれ経営協議会は過半数が学外者ですが、その経営協議会とは経営に関すること、つまり金のかかることほぼ全部の決定に影響を持つ以上、大学自治も学内民主主義もあったものじゃありません。麻生太郎も「目標・計画の設定や定期的な業績評価といった仕組みを通じて国の意思を法人運営に反映させる法人制度」を目標にしていると公言しています。政府や財界が長年大学をいいなりにさせる政策をやってきたことの結果です。そういう意味でポストドク問題、雇い止め問題、競争的資金制度や非人道的な研究室（いわゆる「ブラック研究室」）の問題とも同根であると思っています。今こそ、法人化に異議ありと言いたい。奴隷の道を拒否しよう。私も学生として頑張ります。ありえん長文になってしまいごめんなさい。

大学の自治、学問の自律性を最大限尊重する判断がくだされることを強く望みます

これからも東大で学生として学問を学んでいく上で、体制の透明性が保証されないことはあまりにも不安です。公平公正な民主的プロセスを妨げるものなど何も無いはずで、私が尊敬する東京大学の、その先生方の勇気あるご決断を心待ちにしています。

我が国の学問を代表する機関として恥じるところないよう、十全にアカウンタビリティを果たしていただきたい。

有志の皆様の行動に深い敬意を評します。一刻も早く、公明正大な大学の自治が取り戻されることを希望します。

公正な選考を求めます。

意向投票当日となってしまいました。緊急アピールの理念に賛同いたします。

東大に限った話ではないが、総長選考の不透明性は問題ではないだろうか。また、大学としての多様性を高めていくことが今後望まれる中、本件のように選考会議の独断で総長選考を進め、学内の意見が反映されていないということに多大なる危機感を覚えた。日本、ひいては世界を牽引する立場にあるという自覚を持っていただきたい。早急に見直しを求める。末筆ではありますが、立ち上がってくださった教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

候補者選定プロセスの公平性・透明性の確保は最重要であるとともに最低限の条件であると考えますが、それが全く達成されておらず、公開質問状への一連の回答も不十分だと感じます。さらに（特に第二次候補者の選考における）候補者の多様性の確保も、もはや基本的な義務であるにもかかわらず全くそれが果たされていません。このようなやり方を今回通してしまうこと、およびそれが当たり前となってしまうことに強い危機感を覚えます。

今まで確保してきた透明性を積極的に放棄することに対し不安を覚える。

大学を一部の上層部のものにしないで、全構成員が自由闊達に大学の将来を考えられ、ひいては全構成員、社会に還元される学問の場としてほしいと思った。

東大の運営指針が他大学の運営指針に影響を及ぼすこともあるので、このような不透明なプロセスが本学内のみならず国内の他の国立大学法人にも波及してしまうのではないかと危惧しております。

学生にも情報を！

権力を改めて捉え直した選考を望みます。

本件を個別の事案としてとらえるにとどまらず、大学のガバナンスを正常化する大きな流れの第一歩としていくことが大切だと考えます。

公正公平で、透明性の高い、プロセスを学内の人が皆納得するような総長選挙がなされることを期待します。

透明性が担保されているとは思えず、延期及び情報公開が必要と考える。

透明性のある、誰もが納得する形での総長選考を学生として望みます。

先生方の行動に深い敬意を覚えます。

これほどまで教員の不信感を煽っておきながら投票を強行することは、東京大学にとって何のメリットももたらさないのではないかと。即刻延期を要望する。

私は特に多様性と包摂の観点から総長選考に着目しています。ダイバーシティを推進したい、女性の入学を増やしたいなどと言いながら、学内の権力構造を問い直さないのは、滑稽にすら思えます。

総長選考会議の権限を強めることは、文部科学省の方針であると認識しています。この方針そのものに疑問はありますが、そのような状況の中で、今回の事態が全面的に総長選考会議によって引き起こされたとみなすのもまた短絡的であると考えます。もっとも、総長選考会議に付与された権限は、「望ましい」総長選考を実現するという目的の限りで負託されたものと考えべきであり、このアピールは、これを逸脱したものとして是正を求めているものであると理解し、賛同します。

学生の立場から一点付言すると、意向投票において学生は投票権を持たないため、東京大学の構成員である学生の意見を総長選考に反映させるためには、いわば世論を通じて投票権を有する教職員に届けるほかなく、ここにおいて（第2次）総長候補者の氏名が公表されることは欠かせざるものであり、この点につき今回の総長選考プロセスには納得しかねるところです。

（この文章については公開されて差し支えありません）

時代錯誤社のページで初めて候補者を知りました。他に何の情報もなかったもので、気味の悪さを感じました。教員の方々が声を上げられたので、この違和感が正常なものだったのだとわかり、同時に怒りが湧きました。今回の不透明な選考は、東大に関わる人間だけでなく、社会に対する裏切りです。即刻全てを明るみに出し、公正に選考を行ってほしいです。

時局を鑑みても凍結、延期するべきである。

透明性と公平性のある選挙を要求します

公正な選考が行われることを強く願っています。

よりクリアなマニフェストの提示を求めます。

透明性への疑義のみならず、特に公平性については、候補者リストの多様性確保を強く希望します。東京大学という機関があらゆる点で世界に誇れる機関であり続けてほしいと願っています。

透明性と公平性のある選挙を要求します

透明性の確保をよろしくお願いいたします。

所属する学生にとって総長選考は今後の自らの学生生活を左右する重要な事象であるにも拘らず、透明性・公平性が確保されていないのには大学運営全体への不信感と強い不安感を覚えざるを得ません。情報の公開・第三者が介入した形での調査を行い、透明性が十分に確保された上での総長選考の実行を求めます。

人によっては在学中に総長選考がないという面があり、また、判断根拠が乏しくなりがちであるため、学生に総長選考の投票権がないということは、許容できます。（将来的には検討の余地はありますが、）今回は投票できないことに大きな不満はありません。

しかし、一構成員として今回の総長選考は不可解な点が多すぎて、今後に不安を覚えます。

民主主義的な選考と、現総長五神氏が理系であることから文系の総長を望む。

文科で学ぶ者として危機感をおぼえます

たなじゅんがんば

「率直かつ多様性の観点なども踏まえた多面的な審議が行われた結果」が、全員理系かつ男性のみ、という多様性が欠如している第2次総長候補者リストに残念を感じます。マイノリティでも共感できる総長像を掲示していただきたいです。

この世界に溢れる不透明さや恣意性を率先して排することが、学問に真摯に向き合う場であり続けることに繋がると考えています。

多様性のある大学になることを望んでいます。

工学部の元総長の方が選考委員長（違っていただけです）で、工学部、生産研、外部の医学部の方しか残っていないとのことなので、流石に偏っているのではないかと感じてしまいます。

さすがにヤバいだろ

学生、教職員あってこそその知の場である大学において、その長を私たちに適切な情報開示がなされないまま選出することに対して、疑義の念を抱いています。全ての所属者に対する責任として、プロセスの明示された公正な選出を望みます。

学生に投票権はありませんが、利害関係者として選考過程の公表を望みます。

選考プロセスの一時停止が必要だと思われる

最高学府としての矜持を持った選挙戦を

公正で開かれた選考プロセスを求めます

選考という作業の専門性の高さゆえに、プロセスの適正を求めたいです。

日本の学問、教育を動かす東京大学の総長選挙において不透明な制度が導入されていることを、非常に疑問に思います。文系・理系という垣根を超えて学問が発展する時代にあって、「理系」の教授が主たる候補になっていることは甚だ疑問です。

何よりも公正かつオープンな選考を望みます。

京大化する東大

透明性があることが望ましいがそれは問題ではなく、「不信感が漂っているのに無視して投票を強行する」ことに問題があると思う。選出された総長も学生もそれを拭い去れないまま進めていくのは、手続き上問題があると言えはしないか考える。

学生が蚊帳の外にいる感がすごい、東大全体の方針を左右する選挙なのに学生に対して情報が提供されないのはいかがなものかと感じました。また一次候補者の氏名を開示するか二次候補者の人数を増やすかして、総長候補者には文系学部や女性の職員がいることをアピールするべきではないかと思います。

透明性も公平性もない。最高学府がやることなのだろうか？

緊急アピールに全面的に賛同します。総長選考過程の不透明さに強い不信感を持っています。立ち上がってくださった先生方を応援しております。

総長による本学の方針の影響を強く受けるはずの学生に対して、投票の後にならなければ候補者すら提示されないということは、いくら学生に投票権がないとは言え、軽視甚だしいと思う。

透明性が無さすぎて、権力から学問を守る最後の砦として高校生頃から憧れていた東大が今年で消えてしまうと思い、非常に悲しくなりました

法学政治学研究科から誰も立候補していないので、良くない

不透明で、かつ誠実さに欠ける。とりあえず延期して、全てを詳らかに明かしてほしい。

多様性とは一体何なのかを考え直すべきだと思う。

公正明大な大学運営を望みます

大学としてどうあるべきか、1度立ち止まって考えるべきではないだろうか、それがどんな結論に達したとしても

公平・公正な選考を望みます。

透明性を担保して選ばれた方に東大の未来を担っていただきたいです。

来年度は東大を離れる身分ではありますが、それでも他人事ではないと感じています。東京大学憲章に則った公明正大な選考を望みます。

煽りとかではなく、何を考えているのかわからない。

所属学生でありながら、総長選に関する主要な情報を得られないことに大きな違和感を覚えています。質問状の回答にも目を通しましたが、東大の組織とは思えない的はずれな回答に驚愕しました。全てにおいて大学名に恥じない振る舞いをしていただきたいものです。

選考プロセスを可視化していただきたい。

総長選考会議のブラックボックス化に対する有志一同の要請は真っ当なものであり、その現状を黙認した状態で大学のトップである総長が選ばれることは、一学生としてそのプロセス、とりわけ『求められる総長像』の不透明性に対する疑義を抱かざるを得ません。選考過程の透明化・可視化を強く求めます。

東京大学の誇りの下に、宣言通り公正かつ透明性の高い総長選考を求めます。

公正で透明性のある審議を望みます。

本学が頭から腐食していくことに対する必死の自浄として、今回の件をとらえています。

卒業生でもあるのですが、大変残念です。要望が取り入れられることを望みます。

経営協議会が推薦する方が最年長で、第二次候補者に残されていることがどうしても疑問に持ちます。外部からの候補者としてわざと出来レースで入れられたとしか思えません。

【アピール1】のみの賛同です。

総長選考会議が総長選考の権限を有することには異存はありません。しかし、そのプロセスに対して重大な問題が指摘された状況となっている以上、真摯に検証せずに手続きを進めることが本学にとって取り返しのつかない損失となるという危機感をおぼえます。次期総長が学内のリーダーとして正に認められて正当な権力を振るうためにも、今回の総長選考の一時停止が必要と考えます。

大規模部局の総務担当としてコロナ対応の業務が激増したうえ迷走する総長選考事務に振り回されていますが、この先6年間、構成員に信任されたか不明瞭な総長を戴いた職務に就くよりは、総長選考事務の激務をもう一度繰り返したほうがマシです。仮にこのまま予定者が選考されてしまった場合は、白票が相当数に上ることが想定され、「求められる総長像」にある「組織構成員の幅広い支持を受け」に抵触することとなり、選考会議内規第12条(4)その他総長たるに適しないと認められる場合に該当することが危惧されます。この場合は了解事項第7項及び第8項に基づき代議員の選出からやり直すことになるのではないのでしょうか。以降投票前の現状ではやり直す規定がありませんので、有志の先生方のご指摘どおり選考会議及び総長においていったん停止することが順当と思われまます。

風通しのよい組織運営を望みます。

有志の皆様のご活動には敬服します。

やはり女性と文系が候補にすらいけないというのは、説明出来ないのではないのでしょうか。

選考に思うことは、とにかく、公正な選考であってほしいと思います。一般企業のCEOを決めるのとはやはり性格が異なることをしようとしているはずで。

我々大学側の人間は、大学が公平公正な存在であることを抛り所しているからこそ、入試や試験で毅然と、重い線を引けるのだと思います。そこに疑問符がつくのは、率直に、勘弁してほしいという気持ちです。

文系および女性の候補者が一人もいないのは問題だと思います

総長選考の手続きに疑義が生じている状態では、今後の大学運営に多大な支障をきたす。今すぐに投票の延期と情報の公開を行うべき。

新型コロナ対策に乗じて、十分な議論がなされないままトップダウンで物事が決定されていく様は、今回の総長選挙のプロセスと相似形であり、個人的には危惧を抱いております。

既得権、地位、影響力を維持したい人の存在を疑ってしまいます。

選挙という最も透明性が求められているものが、ブラックボックス化している(しているように見える)ことに反対です。

将来は、真実が公表されることになるでしょう。歴史が物語っています。

有期雇用の特任研究員に過ぎない身ですが、世の中に公表されている範囲で本件のことを調べました。私が問題だと感じているのは、第1次候補者から第2次候補者への選考過程が少数で構成された総長選考会議で決まり、その過程が東大正規教職員に対してすらも不透明であるという点です。その点が事実である場合に限り、この緊急アピールを支持します。

東京大学の構成員として、総長選考に対し大きな関心をもって見ております。本部から離れているため、選考の動向等詳細を承知しているわけではありませんが、第2次総長候補者のリストを初めて拝見した際に、非常に大きな違和感（候補者の少なさ、研究分野・性別の偏り等）を抱きました。その違和感の原因が、今回有志の先生方のHPや東大新聞はじめ一連の報道を拝見し、理解できたとともに、今回選考のプロセスにおける問題点を認識いたしました。問題点を精密に指摘し、声を上げていただいた教員有志・理事有志の先生方、ありがとうございます。世界をリードする東京大学の総長が、現状のような歪められた方法で選考されることはあってはなりません。誰もが「納得できる」、公明正大な方法で選考されて初めて、学内外から支持される総長たり得ると考えます。そのためには、勇気をもって一度立ち止まり、公正な方法・体制でもって選考が行われることを強く希望します。

総長選考会議における不可解な疑惑（議長の意向による表決、匿名文書による特定候補の除外等）については明確な説明を求める。

今までおかしいと思っていても声をあげられなかったところ、こうして立ち上がっていただいた先生方に敬意を表します。候補者の方には問題があるとは思いませんが、総長選考会議によって恣意的に候補者が絞られ、ダイバーシティの欠片もない顔ぶれとなったこと、それが問題ないとして了承されてしまうことに強い危機感を覚えます。

以上